九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

The Irish Body in James Joyce’s Works: Oppression and Liberation

田中, 恵理

https://hdl.handle.net/2324/4474912

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式３）

氏　　名　：田中　恵理

論 文 名　：The Irish Body in James Joyce's Works: Oppression and Liberation
（ジェイムズ・ジョイス作品におけるアイルランドの身体表象：抑圧と解放）

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、ジェイムズ・ジョイスの作品における登場人物たちの身体描写について、19 世紀末から 20 世紀初頭のアイルランド社会との関連から考察している。ジョイスの作品における身体は、これまで重要なテーマとして研究がなされてきた。初期の頃は、女性の身体描写に対するフェミニズム批評が中心であったが、近年では、身体表象の各側面に対する多様なアプローチがなされている。特に、ジョイスの描く身体表現の意味を 20 世紀初頭におけるアイルランドの社会的背景の中で捉える研究が増えているが、その身体表現を社会の抑圧とそこからの解放を示したものとして包括的に論じた研究はない。ジョイスは、身体美よりも実際の身体を培おうと努めたとされる。本論では、ジョイスの作品で示されている実際の身体を、苦難の歴史を抱えながら独立へと向かうアイルランドの社会的背景を映し出す鏡であるだけでなく、そうした社会に存在する支配に対する人々の抵抗と自己肯定を示す表現媒体でもあると考える。

第一部では、アイルランド社会、身体、そしてジョイスに関連する事柄を論じる。第一章では、19 世紀から 20 世紀初頭のアイルランド特有の社会状況がジョイスの身体表象に影響を与えていることを示す。第二章では、先行研究を概観しながら本論の立場を明らかにする。本論は、身体描写の分析よりも社会文化の実態解明に比重を置いている近年の傾向を批判的に捉え、身体描写の分析を研究の中心に据えて身体と社会の関係を考察している。また、ジョイスの初期作品から後期作品を研究の対象として身体表象の意義を包括的に論じているのも本論の特徴である。

第二部では、ジョイスの各作品における男性登場人物の身体描写に焦点を当てる。第三章では、『ダブリナーズ』に描かれる男性たちの「麻痺」を読み取り、彼らの解放が他者の身体を通して自己の身体状態を意識化することで示されていると指摘する。第四章は、『若き日の芸術家の肖像』のスティーヴン・ディーダラスに焦点を当て、身体と精神の問題を論じる。「アスレティシズム」という当時の教育イデオロギーを考察の対象に加えつつ、スティーヴンが身体よりも精神に価値を置くようになっていくこと、そうした偏狭な知識偏重にスティーヴンの抑圧か

らの解放の限界があることを示す。第五章は『ユリシーズ』で描かれる身体描写を政治的文化的に論じる。特にレオポルド・ブルームがフィジカル・カルチャーに興味を持っている点に注目し、彼が考える強い男と「市民」と呼ばれる男が考えるそれとを比較する。ブルームが強さと弱さの二項対立を解体する視点を持ちうることが分かる。

第三部では、ジョイスの各作品における女性登場人物の身体描写に焦点を当てる。第六章では、『ダブリナーズ』に描かれる女性たちの抑圧された状況や結婚への執着が、彼女たちの身体を通して表されている点、そうした彼女たちの「麻痺」は、言葉を発せない口に象徴されている点に注目する。さらに、「死者たち」のグレタが秘めた過去と思いを語る行為によって女性解放の可能性が示されているのを考察する。第七章では、『ユリシーズ』においてポルノグラフィのように描かれている女性たちの姿を捉える。彼女たちの身体は、男性の欲望に迎合するように描かれているが、一方で女性たちも自己の身体を利用することで男性中心社会における自己の存在価値を示そうとしている。ポルノ的な女性の身体描写には女性たちの自己肯定を見ることができる。第八章では、『若き日の芸術家の肖像』の海辺の少女と『ユリシーズ』第十八挿話のモリー・ブルームの身体描写に注目する。彼女たちの身体は男性の欲望を反映しない世俗的な姿で描かれており、そこに父権社会からの女性の解放を読み取る。そうした女性の身体にこそ審美的要素が備わっており、他者にエピファニーを与える力を有しているのである。

第四部では、ジョイスの解放を論じる。自らダブリンを脱出したジョイスは、その後、大陸を転々としながら故郷を描き続けた。つまり、身体はアイルランドから離れていながら心はそこから離れることはなかったのである。第九章では、ジョイスをアイルランドにとらえているのは、ダブリンで生きたジョイス自身の過去と考える。そして、アイルランド社会に囚われている人々と彼らの解放を作品の中で描くことは、彼自身の過去からの解放の追求にもなっていることを示す。

社会純潔運動の影響を受け、多くの作品が検閲の対象になってもジョイスは実際の身体を描き続けた。ジョイスが描く身体は、社会的および歴史的背景をリアリスティックに反映しているだけではない。社会がいかに個人に影響を与えうるか、そしてどんなに厳しい状況であっても人々は生き、そして生きていくべきであるということをジョイスは、作品中に散りばめた抑圧された身体と解放された身体を通して示しているのである。